

槐

かい

岡井省二創刊

平成27年4月号

平成二十七年三月一日発行 第二十五巻第四号 通巻第二八六号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



寒夕焼

高橋将夫

冬 天 に 日 は 一 つ だ け あ れ ば 足 る
信 念 が マ ン ト 羽 織 つ て ゐ る 昭 和
菩 薩 と も 鬼 と も 檜 火 の 照 ら す 顔
樹 氷 林 木 霊 閉 じ 込 め ら れ て を り



樹氷林 八はち寒かん地獄かもしれぬ
戦する星もありなん冬銀河
冬萌や末代までの放射能
寒鴉権力闘争中なりし
根を深く張りし冬木の肌の艶
寒の水かぶり情熱呼び覚ます
臨界を超えんばかりの寒夕焼



槐安集

水野恒彦

音天に還して滝の凍りけり
ちちははの魂魄あそぶ冬茜
光芒を引く雪虫や禱りのとき
月氷る魑^{すだ}魄^{だま}も眠る時なちむ
燃え残る命捧げん龍の玉

加藤みき

祈念する円座の下の寒さかな
女正月只今手持無沙汰也
薄氷に東雲のいろちろちろと
春浅し少年少女合唱団
雪解野や大きな絹のありやなし



中島陽華

法螺貝や女人高野の春浅し
声飛ぶや海の劇場冴返る
七草の牛王宝印しまひけり
右の踝腫らしをり雪景色
まなうらの日はくがね色冬温し

竹内悦子

元日に食す羊羹と馬の肉
聲明や蜜蝋こぼれぬたりける
本棕櫚の束子買ひをる二日かな
福笹に壹億圓の守り札
仏手柑に手をさし出されぬたりけり

雨村敏子

清白をまづ洗ひたる谷の水
新玉のけふのひと日を綸子着て
田平子の花の道ゆく月初め
河豚雑炊松うらうらと晴れてをり
初夢や魔法の杖を手に入るる

本多俊子

昼の酒草石蚕を噛めば山の音
白鳥に流し目といふことのあり
雪山のどん底まつかかかと燃ゆ
冬木の芽詩心いつもあたらしく
シリウスの透きとほるほど青きかな

近藤喜子

苔むすまで生くる途中の小豆粥
ふふみたる一瞬が好き寒の水
寒菊の命だしきつたる緋色
熱く燃ゆ冬青草の根つこかな
日と風に我が身の業も寒晒

瀬川公馨

一日の雪の暫く残りたる
蓬萊の禁断の実を落としけり
くろがねのまだらに光る春隣
樫の動脈静脈デモクラシー
旅子にも持たせてやりぬ室の花

久保東海司

神農の虎を道づれ暖簾酒
扮装の義士は焚火の輪に和む
この朝は鼻唄も出づ刈田晴
事始めなまめく声の祇園かな
一湾の空に輪を画く寒鴉

柳川 晋

福笹が光を曳いてやつてくる
魚心まだ捨て切れぬ目刺かな
山焼くや過去の炎と未来の火
豆撒くや届くところが浄土なり
紙風船ほどの手応へ見逃さず

岩下芳子

酒蔵の井戸に溢るる寒の水
佐保姫の囁き千里広がりぬ
袴を脱いで寛ぐ鬼やらひ
水仙の確と根を張る海の風
極柑とポン菓子を買ふ道の駅

近藤紀子

春の山大般若経響みたり
吉兆の散華舞ひをり春光に
イテと冬の烏もわたくしも
黒田五寸てふ人参料理のレシピ来る
赤ちやんの匂ひ残れる冬座敷

岩月優美子

左義長や龍あかあかと昇りをり
雪女郎情念融けることはなく
昼闇に木霊の響む恵方道
初夢に過去形の人集まりぬ
原点に立ち裸木を撫でてみる

竹中一花

土黒く焼いてどんどの火は空へ
若狭彦雪解の水の甘かりし
空の色抱きし風や冬の街
寝正月門に寿ぐ声ありて
初市や並べてありし古取手



『俳句四季』二月号より転載 俳句と短歌の一〇作競詠

■月とりどり 高橋将夫

竜宮も月の都も古りにけり
日光にダイヤ月光には真珠
夏の月一つに闇の広すぎて
通夜に行く時も帰りも月おぼろ
父はまだ母呼びにこず盆の月
三日月の欠けたところを子が塗りぬ
月光が操るマリオネットかな
月に叢雲日本に火山帯
一日の仕舞ひは月が見とどける
絶巔にありて孤高の寒の月

槐市集

中島昌子

自分史の今どのあたり去年今年
筆圧の確かな賀状届きけり
遺伝子のぎつしり詰まる寒卵
冬木の芽風のことばの聞えたる
雪合戦果て湯舟に声の弾けたる

中田禎子

初夢のうやむやなりし明恵の忌
天狼や囲ひの羊ゆるゆると
日の本に生まれ初日を拝みけり
縫初に久方振りの赤き糸
初閨魔買うて帰らふ延命酒

中谷富子

お目当は福娘なり笹を買ふ
春立つや笛吹きケトル音高し
日脚伸ぶ又探がし居る家の鍵
クラブ振る音まちまちに冴返る
八畳の眞ん中に寝て隙間風

中林晴雄

地下街にせせらぎの音福袋
冬日向花屋に暖房なかりけり
雨戸にも心にもあり隙間風
雪の街下りてゴム長買ひにけり
薄氷や箸一膳が浮いてをる



中道愛子

喰積やいづれ劣らぬ食ひしん坊
初釜や齡かさねて美しく
久々に机に向かふ女正月
オムレツの色のほどよし寒卵
寒の入り人の生死のあわただし

橋本順子

雪の日の赤き実鳥を呼ぶやうに
羅生門のむかう枯野となりにけり
車椅子にかがんでをりぬ冬堇
一年ごとにいとしくなりぬ古雛
鯨泳ぐ潮の目覚めはじめけり

前田美恵子

鉄道に裂かるる冬の草千里
売り声の脹らむ境内初天神
二の鳥居まで続きをり斑雪
若菜野にあらぬ欺きありにける
人日の暁に煙立ちにける

柳橋繁子

冬將軍八百屋魚屋賑へり
歳晩の布留の社の東天紅
城址あり風立ちそめし冬櫻
食卓にインドカレーの四日かな
法の火の揺れてをりけりすきま風

山田佳子

彈初や婿の十八番おはこはイエスタデイ
寒灯に急く足音の二・三人
大寺の軋む回廊日詰まる
花卉餅前に幼の淑気かな
涔涔と音なき音す旅の朝

吉田順子

初日の出年を刻みて八十路かな
松には松杉には杉の淑気満つ
走り根にみなぎる力冬櫂
燃えあがるかに雪嶺の夕茜
一山の風は休まず枯尾花

槐集

高橋将夫選

氷片をあたたためてゐる冬の水
枚方 熊川 暁子

働いて働いて来たほおかぶり
うかうかと夢の世に足袋脱いで来し

大宇宙体内宇宙大きくさめ

注連飾りはづし大阪無季となる

雪達磨老いては同じ顔となる
大阪 江島 照美

縄飛びに息の乱れと乱れ髪

寒椿はらりはらりと身を削ぎて

レトロビル昭和モダンの冬の月

さらさらもしつとりもある雪の肌

空だつて生まれかはれる四方の春
有松 有松 洋子

素直さに救はれること蕪洗ふ

殉教者のごとく笑みぬて冬のピエロ

新しき風のひしめく初硯

つなぐ手のありて坂道冬ぬくし

はるかなる始祖鳥のこゑ浮寝鳥
摂津 中田 禎子

雪の夜一角獣の真つしぐら
危ふさの少年美しき皮衣

物の怪の炎は青し初明り

若水やよるずの神の動き初む

歳月の確かな重み初山河
岡崎 寺田すず江

初明り燃ゆるいのちのありにけり

一筋の日の射してをる寒九かな

詩ごころを追うて風花舞ひにけり

待春の胸に昂りおぼえけり

鶴の声地より沸きたり茜雲
吉田 順子

枯野ゆく吾胸中のみえるまで

霜柱太る大地の闇の音

稜線にかぎろひ立てる淑気かな

寒木瓜の深き緋色に力得し

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

働いて働いて来たほおかぶり 熊川 暁子

「働いて働いて」から「ほおかぶり」への飛躍に度肝を抜かれた。寒風の中でひたすら仕事を続ける男の姿が目には浮かぶ。働きついで働いた父母の姿もそこにある。「頬被」が全てを語っている。更に、〈大宇宙体内宇宙大きくさめ〉の句を見て、「大宇宙体内宇宙」から「大きくさめ」への飛躍に再び度肝を抜かれた。人体もまた一つの宇宙だから「大宇宙体内宇宙」は驚くまでもないが、「大噓」には驚く。体内から宇宙が飛び出してしまおう。掲句の「頬被」と当句の「大噓」という季語の輪旋は、この作者でなければできない技と思う。

〈うかうかと夢の世に足袋脱いで来し〉は、「他に帯留めなんかも忘れてきたのではないの」と聞きたくなるような一句。〈氷片をあたためてゐる冬の水〉の句、水に氷が溶けるのだから、こういう視点もうなずける。

〈注連飾りはづし大阪無季となる〉は季節感の乏しい都会の景をよく捉えている。「無季となる」がいかに俳人らしい。

雪達磨老いては同じ顔となる 江島 照美

雪達磨が溶けて来ると、どれもみな同じ顔に見えてくる。そ

の過程を「老いて」と表現したところが味噌。人間もまたそうなのかもしれない。行き着く所はみな同じだから。

〈寒椿ははらりはらりと身を削ぎて〉は寒椿に心眼を以て観入した一句。

〈さらさらもしつとりもある雪の肌〉の句では、粉雪牡丹雪などのいろんな積雪の肌がストレートに表現されている。

つなぐ手のありて坂道冬ぬくし 有松 洋子

つないでくれる手の有難さを日々実感している作者ならこそ感謝の一句。坂道は人生の坂道。

〈空だつて生まれかわれる四方の春〉では大空の変化を「生まれ変わる」と捉えた。健康を願う作者の精神の風景。「四方の春」がめでたい。〈殉教者のごとく笑みぬて冬のピエロ〉はいかにも作者らしい感性の句。

危ふさの少年美しき皮衣 中田 禎子

皮ジャンを着た若者にどこか危うさを感じ取った作者。さて、読者はどんな美少年を想像するだろうか。

〈はるかなる始祖鳥のこゑ浮寝鳥〉の句、浮寝鳥を見ていると、鳥の祖先とされる始祖鳥の声が聞こえてきそう。

詩ごころを追うて風花舞ひにけり 寺田すず江

風花は詩ごころを追って舞っているという。これぞ詩ごころと言ったところ。〈以下略〉